ミハイル・バフチン著作集 7

叙事詩と小説

ミハイル・バフチン著　川端香男里／伊東一郎／佐々木寛訳



需要全本请访问 www.ertongbook.c

叙事詩と小説——ミハイル・バフチン著作集⑦

一九八二年二月一日　初版発行©

定価二八〇〇円

川端香男里
伊東一郎
佐々木寛

訳者

発行者　加藤宣幸

〒101 東京都千代田区西神田二七十三
発行所　株式会社 新時代社
電話 〇三—二六三—二六一一

ISBN4—7874—3017—3

落丁本・乱丁本はお取替えいたします

叙事詩と小説

М. М. Бахтин

Роман воспитания и его значение в истории реализма, в кн. Эстетика словесного творчества, М., 1979.

Рабле и Гоголь, Из предыстории романного слова, Эпос и роман, в кн. Вопросы литературы и эстетики, М., 1975.

——目　次——

ゲーテと教養小説（佐々木寛訳）　5

小説の歴史的タイポロジーをめぐって　7

教養小説の問題　25

ゲーテの作品における時間と空間　37

カナーエフ宛の二通の書簡より　98

ラブレーとゴーゴリ（佐々木寛訳）　103

小説の言葉の前史より（伊東一郎訳）　135

叙事詩と長篇小説（川端香男里訳）　207

解　説（川端・伊東・佐々木）　272

需要全本请访问 www.ertongbook.com

本文中ゴシック体の部分と傍点を付した部分は、原書でわかち書きやイタリック体によって強調されているものである。

本書では(1)、(2)……の注〔原注および訳注〕は見開きの奇数ページに並べ、また＊印の注〔ロシア語版編集者注および訳注〕は当該論文の末尾に置いた。

ゲーテと教養小説（一九三六―一九三八）

――教養小説とそのリアリズム史上の意義

（佐々木寛訳）

小説の歴史的タイポロジーをめぐって

小説（ロマン）ジャンルを歴史的に解明し研究することの必要性（表現形式（フォルム）の静態的な研究でも、文学規範（ノルム）としての研究でもなく）。このジャンルの変種の多様さ。それらの変種を歴史的に分類する試み。主人公の形象を構築している原理に基づく分類――遍歴小説、主人公を試練する小説、伝記的（自伝的）小説、教養小説。いかなる具体的な歴史的変種も、こうした原理を純粋なかたちで保持するものではないにしろ、主人公を造形するあれこれの原理の優勢をもって特徴づけられる。すべての要素は相互に規定しあっているがゆえに、主人公を造形する一定の原理は、題材構成（シュジェート）の一定のタイプ、世界の一定の概念と、小説の一定の構成と結びついている。

1　遍歴小説

主人公は空間を動く点である。この点は本質的な諸々の特徴づけを欠いており、それ自体としては小説家の注目の的となっていない。空間の中での主人公の動き――遍歴彷徨、それに幾分かの冒

険稽事（主として試練タイプの）は、作者に世界の空間的な多様さ、静的に捉えた社会の多様さを展開させ、提示させる（諸国、諸都市、諸文化、様々な国民性、種々の社会的集団および彼らの生の特殊な諸条件）。主人公の設定と小説の構成のこのようなタイプは古典古代の自然主義（ナチュラリズム）に特徴的なものであり（ペトローニウス、アープーレイウス。エンコルピアその他の遍歴、ろばになったリューツィアの遍歴）、またヨーロッパのピカレスク小説――『ラサリーリョ・デ・トルメスの生涯』〔一五五四年〕、『グスマン・デ・アルフェラーチェ』〔一五九九～一六〇四年〕、『フランシオン』〔一六二三～一六三三年〕、『ジル・ブラース物語』〔一七一五～一七三五年〕その他――に特徴的に見られる。より一層複雑化されたかたちでこうした主人公の造形原理が支配的なのは、デフォーの冒険的ピカレスク小説（『キャプテン・シングルトン』、『モル・フランダース』その他）、スモーレットの冒険小説（『ロデリック・ランダム』、『ペルグリン・ピクル』、『ハンフリー・クリンカー』）である。そして何らかのかたちで複雑化されたこの原理が、ピカレスク小説の系譜をひく十九世紀の冒険小説のいくつかの変種の根底には見出される。

遍歴小説のタイプに特徴的なのは、世界の多様性についての純粋に空間的で静態的（スタティック）な概念である。世界は、諸々の差異ならびに対照（コントラスト）の空間的な隣接としてある。人生は、成功―失敗、幸福―不幸、勝利―敗北といった対照的な境遇の交替・継起である。

時間の諸カテゴリーはきわめて貧弱である。このタイプの小説に見られる時間はそれ自体としては本質的意味および歴史的色彩を欠いている。《生物学的時間》――主人公の成長、青年期より壮年期をへて老年期に至る彼の変化――ですらも、全く見当らないか、もしくは形ばかりで言及されるにすぎない。このタイプに属する小説で作り出されているのは、一瞬一瞬、一刻一刻、一日一日といった（全一的な時間のプロセスから切り取られた）近接した時の隣接（モメント）によって構成される冒険（アヴァンチュール）の時間である。こうした小説にふつう見られる時間の描写は、《まさにその一瞬》、《つぎの瞬間》、《一刻早く》、《翌日》、《かの時早く、その時遅く》、《間にあわなかった》、《先んじた》等々であり（小競り合い、会戦、決闘、乱闘、強奪、逃走といった冒険的行為の描写に際しての）、またそうした行為の舞台背景としての《昼》、《朝》、《深夜》である。深夜その他が有する独特の冒険的な意義。

歴史的時間の欠如の結果として際立つのは諸々の差異、対照のみである。本質的な諸々のつながりはほぼ完全に欠如している。民族、国、都市、社会的集団、職業といった諸々の社会的・文化的現象を全一的なものとして理解することを欠いている。ここから生ずるのがこうした小説に特徴的な、他の社会的集団、民族、国、生活様式等々を《エキゾチズム》として受けとめる態度、すなわち剝出しの差異、対照、異質性の知覚である。さらにここから生ずるのが、こうした小説の変種が

需要全本请访问 www.ertongbook.com

もつ自然主義的性格（ナチュラリズム）――単に隣接もしくは継起するにすぎぬ個々のモノ、現象、出来事への世界の分解である。小説中の人間の形象――かすかに認められる――は、彼をとりまく世界と同様に、完全に静態的（スタティック）なものである。人間の形成、発展をこの小説は知らない。人間の境遇が激変することはあっても（ピカレスク小説では貧乏人が金持ちに、素姓の定かでない浮浪者が貴族になる）、人間自身は変らないのである。

2　試練の小説

第二のタイプの小説は主人公たちに対する一連の試練として、彼らの貞節、献身、勇敢さ、徳、高潔さ、穢れの無さ等々の試練として構築されている。これはヨーロッパ文学において最も普及をみた小説の変種である。小説作品のほとんど大多数がこれに属しているといってよい。この小説の世界――それは主人公の闘いと試練の活舞台である。様々の出来事や冒険、それらは主人公の試金石となるのである。主人公は常に、既に出来あがった、変化を知らない人間として提示される。彼の様々な資質はすべて小説の発端から提示されており、それらは小説の全展開を通じてただ点検され試練されるのみである。

試練小説が起ったのも同じく古典古代の土壌においてだったが、その際に二つの基本的変種のか

たちをとった。第一の変種はギリシャ小説に代表されるものであり（『エチオピア物語』〔三～四世紀頃〕、『レウキッペーとクレイトポーン』〔二～三世紀頃〕その他）、第二の変種は初期キリスト教時代の聖者伝（とりわけ殉教者たちのそれ）である。

第一の変種であるギリシャ小説は、理想的な主人公と女主人公の両者における愛の貞節と純粋さの試練として構築されている。ほとんどすべての冒険が、主人公たちの純潔、彼らの純粋さならびに相互の貞節に対する侵害の企てとして仕組まれている。主人公たちの諸々の性格の静態性、不変性および彼らの抽象的な理想性は、いかなる生成、発展をも排除しており、主人公たちを変化させ形成する人生の経験として事件、見聞、体験を用いることをいかなるかたちでも排除している。

このタイプの小説には、前述の遍歴小説とは違って、以後の小説の歴史に多大な影響を及ぼすことになる発達した複雑な人間の形象が見出される。この形象は本質的に統一性をもっている。けれどもその統一性は特殊なそれ、静態的かつ実体的なそれである。ギリシャ小説は《第二ソフィスト派》を土壌として生まれ、自らの内部に修辞的な因果論を育んでいったのだが、この小説が、基本的に修辞的・法律論的な人間概念を生み出すのである。既にこの時点において、その人間の形象には、咎有り—咎無し、審理—弁明、弾劾、犯罪、徳、勲功といった法廷弁論術的な諸々のカテゴリー、諸々の概念——それらはきわめて永きにわたって小説の上に君臨し、小説の主人公を咎人もし

くは弁護依頼人として提示するように仕向け、小説をして主人公に対する一種の法廷たらしめることになる――が深く浸透していた。ギリシャ小説にあっては、それらのカテゴリーはいまだ形式主義的な性格を持つにすぎないが、しかしその場合でもそれらは、審理、弁護、弾劾の主体としての人間、罪もしくは勲功の担い手としての人間という独自の統一を創り出している。ギリシャ小説における法律論的、法廷弁論術的な諸カテゴリーはしばしば世界に対しても適用され、出来事を事件へと、モノを証拠物件へと転ずるといったことが見られる。こうしたテーゼすべては、ギリシャ小説の具体的素材の分析の上に展開されている。

同じく古典古代の土壌に逸早く起った試練小説の第二の変種では、人間の形象も試練のイデーも、そのイデオロギー的内容が本質的に変わる。この小説の変種は、初期キリスト教時代の殉教者ならびにその他の聖人たちの聖徒伝の中で準備された（ディオン・フリゾストゥム、クリメンティンの一連の伝説〔三世紀〕その他）。この変種の諸要素は、アープーレイウスの『メタモルフォーゼ』（『黄金のろば』）の中にも認められる。この変種の根底にあるのは、様々な受難および誘惑による聖人の試練というイデーである。この試練のイデーはもはやギリシャ小説に見られるような外面的、形式的な性格を帯びていない。主人公の内面生活、主人公の精神状態が、彼の形象の本質的なモメントとなっている。試練の性格自体、イデオロギー的に深められかつ洗練されたものとなって

いる――とりわけ様々な疑惑によって信仰が試される箇所の描写において。総じて試練小説のこの変種の特徴をなすものは、冒険的性格と問題の探究および心理との結合という点である。とはいえその場合でも、試練が行われるのは、出来あいの、教条的に理解された理想という観点からである。その理想自体は、運動も生成も知らない。同様に試練を受ける主人公の方も、出来あいの、予め決定済みの存在であって、様々な試練（受難、誘惑、疑惑）は彼にとって自らを形成する経験とはならず、それらが彼を変えることはない。そしてまさにこの主人公の不変性という点にすべてがあるのだ。

試練小説のこれに続く変種は中世の騎士道小説（その大多数にして本質的な部分）であり、疑いもなく古典古代の「試練」小説の双方の変種の著しい影響のもとに成ったものである。騎士道小説に見られるかなり多様なタイプは、試練のイデーのイデオロギー的内容が持つ様々なニュアンスに規定されている（試練のイデーの内容において、騎士道的要素、教会的・キリスト教的要素、神秘主義的要素のいずれが優勢であるかによる）。十二～十三世紀の韻文騎士道小説ならびに十三～十四世紀およびそれ以降の散文騎士道小説（『アマディス物語』や『パルメラン物語』を含めて）の構成の基本的諸タイプの簡単な分析。

そして最後が、試練小説の最も重要で歴史的に最も影響力を持った純粋な変種――バロック小説

である（デュルフェ、スキューデリ、カリプレネード、ローエンシテインその他）。バロック小説は試練のイデーから、そこに込められている題材構成上のあらゆる可能性をスケールの大きな小説の構築のために抽出することに成功した。このゆえにバロック小説は他のいかなる小説にもまして試練のイデーがもつ構成上の可能性を明るみに出すと同時に、現実をリアリスティックに洞察する際のみずからの限界性と制約性をも露呈する。バロック小説は英雄小説（ヒロイック）の最も純粋で首尾一貫したタイプであり、叙事詩にみられる英雄化とは別の仕方で小説における英雄化の特殊な位相を開示する。バロックはいかなる中庸さ、ノーマルさ、典型性、月並みさも許容しない。すべてがそこではとてつもない規模にまで至らしめられる。法廷弁論術的なパトスもそこでは極めて一貫性を保って明瞭に表現される。人間の形象の構成、諸々の特徴の取捨選択、それらの特徴を一つにまとめ上げること、様々の行為や出来事（《運命》）を主人公の形象に関係づける仕方は、彼に対する弁護（弁明）、免訴、名誉の称揚のかたちをとるか、反対に彼に対する弾劾、摘発となるかのいずれかである。

バロックの試練小説は後代に二つの発達の分枝を与えた。即ち、(1)冒険・英雄小説（アヴァンチュール・ヒロイックロマン）（ルイス、ラドクリッフ、ウォルポールその他）と、(2)パセティックな心理のセンチメンタリズム小説（リチャードソン、ルソー）である。試練小説の諸特徴はこれらの変種にあっては根本的に変わっており、とくに後者についてそれがいえる。そこには独特な弱者のヒーロー化、《とるに足らぬ人物》のヒ

ーロー化が姿を現わしている。

以上挙げた試練小説の歴史的諸変種がもつそれぞれの違いにもかかわらず、これらの変種はすべて、試練タイプの小説がヨーロッパ小説史に占める意義を決定づける重要な一般的諸特徴の一定の総和を備えている。

（1）題材構成（シュジェート）　試練小説の題材構成はつねに、主人公たちのノーマルな生の営みからの逸脱の上に構築される。典型的でノーマルな普通の生涯においては見られない様々の例外的な出来事や状況の上に構築される。例えばギリシャ小説にあっては、描き出される出来事の大多数は婚約から結婚までの間、ないしは婚礼から初夜までの間等々に生ずること、つまり、本来あってはならぬ出来事、人の一生において隣り合っている二つのモメントを引き裂く出来事、生のノーマルな歩みを遅滞させる出来事、けれどもそれが生を変えることはない、そうした出来事なのである。恋人たちはつねに最後には結ばれるのであり、そしてそのあと彼らの生涯がノーマルに流れてゆく部分はこの小説の領域外にある。この点に、この小説に見られる時間の特殊な性格がある。この時間は現実の人間の一生がもつ継続性というものを欠いている。ギリシャ小説とそしてとりわけバロック小説とに共通して見られる、偶然が果たす格別な役割は、まさしくここからきている。一連の冒険（アヴァンチュール）として構成されているバロック小説中の諸々の出来事には、どのような伝記的および社会的な意義も典型性も

需要全本请访问 www.ertongbook.com